

畫本西遊全傳

四編

二



八遠江  
2500  
40-32



門 遠  
2500  
40-32

池清



繪本西遊記四編卷之貳

岳亭丘山譯

她女求陽

元神護道

八戒の山を下り一條の小徑を求め五六里餘り上前往る処  
 小勿心ち兩個の女怪あり井の邊水と汲居る八戒是を看  
 て色を覆て女怪々々と喚々々彼兩個大い小驚りて這和尚  
 甚不禮なり忘生我門を妖怪と喚やと釣桶の棹を把延て  
 八戒が頭を連打小打るる八戒大い小驚り頭を抱て山上  
 小走つと返り長兄此地方の妖怪果て勇猛なり彼山下に兩個  
 の女怪あり我一両喜妓精々々と喚々々他便ち棹を把て我  
 を打つる行者是を聞て笑て曰く你已小妖怪と呼ば他が怒  
 り理あり你今像と變て再び他寺を伺ひ来と八戒曰く我今

像と愛し行とも亦他们小打え行者曰く你他们と妖精と  
呼変る多し他輩若我寺と同ト年記るるば姑娘と呼若老  
を奶奶と呼へ然るに那ぞ打る事有んや八戒是を伺て我  
早く是と知を他们小打とて遂小一個の黒肝和尚と  
愛し再び山の坡下に走り往かの女怪が水汲在と云ふ到  
礼を施して姑娘這様水水を汲て何ゆゆみやと云を兩個の  
女怪笑て曰く長老未歴を知らぬは我家の老夫人昨宵個  
の唐僧を帯飯しあひ我命とて陰陽交媾の好水を汲  
せ筵宴を安排て唐僧と親俚と飯ん要る八戒這変を聞早  
し急ふ又山上に跑返り師父の既小妖精と親俚を飯ゆ汝  
僧疾く行裏を出せ個々是を取分ちて古御小飯えくと云を

行者曰く歎子亦乱説を飯那ぞや然を我快く其女妖  
が後小従ひ往く他洞中小至り古父の動靜を伺ひ来ると  
てまより三個一斎小山を下りて遙小見を彼兩個の女状を  
水を汲終りて南小向ひて歩行ゆ行者が輩二個も後小連  
きく行るが一片の崖の邊小彼女怪を看失ひたり三個も  
那里小至り崖の頂小轉り出せを果然一座の樓門有樓上小  
階小無底洞と云る六固の大字を彫附り門内却て傍宇  
まぐ一塊の大石十余里小跨る石の正中小一箇の洞あり底の深  
浅計りし知るるは行者是を見て是管は妖精が巢穴なり你  
寺少時爰小在て寺へ我日裡小入り動靜を伺ひ来るとく  
身を揺ると洞中小飛入り斯て行者洞の裡小入て看を却て

八  
戒大の  
女怪お打る



明々朗々々々唯是一個の世界小出らる如く日色風吉を  
 草竹木人間世界小異るは行々て見を亦爰小樓臺房  
 舎許委あり行者忽ち一隻の蒼蠅と變り眞深く飛至り見  
 を一箇の草亭の裡に彼妖精绝色の美女と變り教女の女  
 妖的寺を會へ筵宴の準備を倣居らる行者亦東の廊下へ  
 飛行看るは二藏の一室の格子の鎖る裡小座て忙然と左  
 へり行者格子の裡小乘り二藏の頭の上小住り師父と  
 一吉呼々を二藏行者が色を問つけ悟空你未どる疾く  
 我を救ひ呉よ行者曰く妖精當今筵宴の準備を倣師父  
 と親事と倣んとは我思ふ小師父の他と夫婦小成或は一男  
 半女を生下給り却て師父の子孫を住め和尚と成小勝

之く三藏牙を咬て曰く你這場小至りて尚我を毀んと為や  
 我大唐を出りより以来一毫の七女念を生せ若此妖精小因  
 て真陽を亡り永世輪廻小隨入て生々身を飯る事此能を  
 行行者笑て曰く師父恨を事なる我計策を設て救  
 ら今妖精酒を備て師父小進せんとは師父少時堪て他  
 が一鐘を喫師父又急小他小一鐘を斟鐘中の一箇の喜花  
 を斟記て他小送り我其時蟻螫虫と變り喜花の下  
 小飛入他小肚の裡小吞下らる時肚の裡小入て心の伏小  
 他を困苦降伏せしめ候ん二藏是を聞て大い小惟喜我其  
 如く倣べらると曰く是へ妖精快東廊に進を来り鎖を聞  
 きて裡小入唐長老這邊へ来り一鐘を飲て樂を給へと二

藏の手を携て扯立る二藏没何女怪と俣小草亭の裡  
小出の女を女怪日鐘子を奉て一杯と吃二藏小虫へたる三  
藏止事を得鐘子を奉取揚少時躊躇おるるは行者  
師父の耳の中に飛入此酒の葡萄酒より一杯を喫めども昔  
かよと低語を二藏遂小此一鐘を喫然る向の計策の如  
く親手一鐘の酒を斟杯中喜花を斟起るる時行者早  
く蟪蛄虫と愛ト喜花の下小飛入て妖精を飲乾を待居る  
二藏則ち鐘子を妖精小送りぬを女怪大の小怪喜急ぎ  
手を取て二藏を拜却て酒を飲日鐘子を下に指置て幾  
句の情話と訴つ女時と鐘子を取揚るる時彼喜花已小消  
果て彼蟪蛄虫現と見えぬ女怪小指を以て虫を挑けたり地

上小弾き捨るる行者謀計の成るを見て口惜く思ひ即  
時一隻の大鷹と愛ト翅を抜爪を輪岡酒看卓席解血硯の  
類いと盡く打碎きて外面小向ひて飛去けり女怪是を見  
て大の小驚き這洞中小原這揺るる玄田生る思ふ小今日親  
事を做小善さる日ふて天より此火ひ下せるるん我又更  
小良辰を擇改めて唐長老と親俚を做へると亦三藏を  
東廊の裡小送り推籠おれた小妖的と呼で筵宴の傢伙  
を收りさせり却説行者の草亭を飛出草花の裡小陰を  
て女時潛居るるが勿心ち後迎の方より散乱と香の烟  
つと翫つと出々るるは行者不審思ひ身を轉て打探看小  
一座の石壇の上小一張の卓子を備け卓子頭小香白を焚上

面々両固の大金宇の牌子あり是を誦ふ一個の尊父李天  
王之位まゝ一個の尊兄那叱二太子之位と寫着り行者  
是を看て満心歡喜遂に彼牌子と香炉とを取て直洞  
外に出八戒汝僧亦が北に居る處へ飛飯と啼々吟々として  
笑ひ居り八戒汝僧是を見ても向て曰く長兄這様小僧  
喜ぶ人の師父を救ひ出さぬや然れども師父の見ゆらざる  
更の奈何行者彼牌位と香炉とを地小指置て曰く我師  
父を救ふ及ば此牌位を以て玉帝小許へ奉らば師父の自  
然助つ給ん汝僧曰く此牌子那里に有るや行者曰く  
此牌子則ち彼女妖怪が供養する所の牌子なり想ふに彼妖  
精は李天王の女兒なり二太子の姪なり他九氣を奪て下

界小到り妖邪と成て我師父を奪りぬらん我今より天  
上小昇り此牌位香炉と証證と做玉帝に奏し奉り李  
天王父子を呼下つて我師父を救むべし八戒が曰く玉帝  
に奏聞せんかの告文を讀みて行者曰く我則ち告  
文を玉張へして頃て行李を聞き師父の紙筆と取出し張  
の状子と認め是を袖裡に推納し牌子香炉と手小取て  
勅斗雲小打駕て急ぎ天上小昇り  
心猿識得丹頭 蛇女還歸本性  
行者直小南天門の裡通明殿に到り四大師を迎ひ禮  
を作て仔細を頼り冥宵殿の下小入頃て玉帝を拜し牌  
位と香爐と取出し彼紙狀見を呈上り玉帝是を取



托搭天王  
怒て悟空を  
斬んと凡

新古今言四續之二



揚て読下し人其文小曰

告狀人孫悟空年甲在縣係東土唐朝取經僧唐

二藏徒身告為假妖攝陷人口事彼有托塔天王子

灌同男哪叱大子閨門不謹走出親女在下方陷

空山無底洞變化妖邪迷害言命今將師身攝陷

曲空遂之所無踪跡切田心伊父子不仁故縱女氏

成精害眾伏乞憐難行拘至案收邪救師明正

其罪深為回心便有此上告

玉帝是看早于坡馬さめい是全々李天王が過失るべし

急ぎ狀子小批を居太日金日生を回て命のひ行者と同

く狀子を持せて托塔天王の住まゝ處の雲樓宮小使し

金星昔を領し行者を引持て李天王の宮宅小到を天

王多ぎ出迎へ禮早て後彼狀子を受取読も終はと大い小怒

つて曰く這猴孫我を畏れ告る我志生這様の事有んや

金星曰く天王怒つとを住る今牌位香爐御前小有て証見

と云天王曰く我唯三個の男子一個の女兒あり大鬼の名の

金叱と呼今如来小侍奉て前部護法とある二兒の名の木叱

南海小在て觀音菩薩の徒身と為り二兒の哪叱常小我

身邊小在て朝小隨て駕を護る一女の名の貞英と呼て今星

儂小七歳人事も尚知は忘生妖措と成んや這猴孫實小

惡むべし聲言下界の小民さる評告の罪ハ三寺を加ふる法

あり況や我ハ天上の元勳る目斬て後奏さるの職を受我目

西遊記 卷之四十四 第二

他を斬て後入朝せんと魚肚薬又の諸將を呼遂小行者を縛  
 縛多を金星の曰く我御前小在て他と同く旨を領は念  
 生他を縛めらや天王曰く他が如きの反人寔小免難金星  
 少時庫め我且他を斬て後同く朝小入ぐと破妖刀を取  
 出巴小斬んと為處小勿心一室小色有て父王少時待ふと  
 呼つて那叱三太子立出する天王是を看て你何の故に我を住  
 ろや二太子の曰く父王去心せりる支あり寔小女兒下界在て天  
 王曰く我唯你们四個の兄弟のそり念生又外小女兒もん  
 や太子の曰く彼女兒一箇の妖精小て二百年以前靈山小  
 在て如來の香茶宝燭を偷し食ふ如來我寺小命と他と扱  
 くと給ふ當時父王如來小して他が命を救ひめり他其回心と

思ひて遂小父王を拜と父と唱へ我を拜と兄と做後心を改  
 めて下界小右て牌位を設て木白を備ふと聞て他不期も  
 又妖精と成て唐僧を陷害却て孫行者小我れを告ら他  
 則ち結拜の回心女小て同胞の親妹小あらは天王驚て曰く  
 我寔小是を去心せり他が名の何と云ふぞ太子の曰く他三  
 箇の名あり上首金白毛老氣精と云り宝燭を偷を以て改  
 めて半截觀音と号け後下界小右て亦地湧夫入と做て天  
 王當下初て省悟親手行者が繩を解んとまら小行者却  
 て身を轉廻し唯我繩を解んとまら我此依小玉帝小見  
 て変の始末を奏まら金星疾く我を列て飯のめへ太子天王と  
 御前小於て折年せんと口小任せて嘆ぎたり天王及太子何金

星を央て方便を求む金星再三行者を和め清々小細めの繩  
 を解下し殿上小座しめ金星又行者小對ひ謂て曰く今大聖  
 御狀を告て妖精の天王の女兒多りと云天王の我女兒小右は  
 と云て兩個御前小右は只管折辨し理非速う小不分とれたる  
 管は兩三日を過ぎて天上の一日の下界の一年を過ぎ彼妖精  
 て師父と親俚を倣を勿心ち一個の小和尚を生じ遂小師父  
 を洞中小住め置を却て你が心一箇めて一大事を過つ小右は  
 や今唯玉帝へ解狀を口王上て李天王父子と俱小下界小至  
 て你的師父を救ふ小如く行者是を聞て打底頭老官兒の言  
 実小理あり我然らるを你的面小受て以官事を任まぶと遂小  
 張の解狀を寫め金星と俱小靈宵殿小到り玉帝へ回美天

一々々の天王父子大きに惟喜急ぎ天兵を引領て行者と俱  
 小南天門を立出て安時の間小下界小降つと暗空山無底洞  
 にぞエカとたる兼て待さる八戒汝僧天王父子の来つとみと看て  
 多死禮を倣て相見え妻の仔細を語つとあひ此皆一命小洞小  
 至つと日行者と太子と天兵を領て洞中小下つとら彼女妖  
 精の此日亦筵宴を設け二藏を草亭の裡小推携へ出已小親  
 事を倣んと欲する處小乍ち許妻の人音因えけり小ど頓て外  
 面小逃りし出行者を見て大小驚りと忽ち両口の劍を打振て  
 伐て掛つと看々後邊小哪叱太子の居るを見と大い小驚馬さ  
 怕れを倣俄小地上小拜伏し倒れ臥々ど太子則ち衆位の  
 天兵小命し傳妖索を以て女妖精を細めさせ其外洞中の



悟空  
旅客の  
衣服  
と奪

小妖們を盡く細り取洞門外に引出しつゝ行者の跡より師  
 父と尋て助け出づ河を出て来つゝ八戒汝僧亦大り小惟  
 喜師徒四個天王父子に拜謝せしむ天王父子の妖精を率領  
 て天上小皈り去るゝ三個の徒弟們的三藏を捉けて又西方  
 大路不出つゝ

難滅伽持圓大覺 法王成正體天然

話説三藏師徒の又西小向ひて進みつゝ小時正小仲夏梅雨  
 の節小當り雨小活ひ日に嘆く只管急ぎ行つゝ處小勿心前  
 小善財童子現れ出穴中より高く叫んで曰く唐僧静小ま  
 り此西五六里の則ち滅法国と呼ら土地小を彼国王此三年  
 前より羅天大愿と立二万個の和尚を殺んと誓ひ這兩年小

已小九千九百九十六個の僧を殺し今四個の和尚を要り殺  
 て二万の教と満んとい唐僧城小へ入り巨くその防ぎを傲り  
 我今菩薩の旨を領し是を告ん為小未だつゝ南を  
 差して飛去つゝ三藏是を聞て空に向ひて礼拜し戦々兢兢と  
 て行者と呼息塵と此國を過しやと曰へ行者曰く師父  
 憂ひ多し更さるゝと今天色既小晚んと見若御民城小帰る者  
 有て我れを見れば悪かりん少時僻静なる所小身を潜め  
 商議を假て行ぐと大路を避て一個の坑坎の中小至り行者  
 八戒悟浄小向ひ你們爰小在て能師父を保守老孫先  
 動静を打探来るゝとて身を奪つて城中小飛行す二個の摸  
 燈蛾見と爰街上下小飛下り六街三市の人家を伺ひ答

を廻りて行ふ此時早黄昏を過ぎてを家毎小燈光を點て  
家裡の光景明く小見えたる爰小一簷の飯店あり裡へ入て着  
を八九個の旅人大家々々衣服頭巾を脱捨て酒小酔て打臥  
居る行者是を見て一固の計策と思ひ附家路と飛廻りて  
燈光を盡く打消本相を現し彼四五個の衣服頭巾を  
小批取悄悄小外面向小跑り出又雲小乖駕て師父の居る  
處へ飯つとまり三藏小向ひて曰く師父此處を過んと思ひぬ  
り和尚の模様ゆへに恨む難く我今飯店にて幾件の衣服頭  
巾を借来しり我今是を著て俗人小打扮城小へ買入る  
と云て飯店小一宿を要め明朝五更の時打立て城を出を假  
令我々と見ら者有とも和尚と悟る的あるんやと云ふ三個

是を聞て都て班らると是小同く夫より個々俗人の衣服頭  
巾を着く袈裟法衣の類ひの皆行李の裡へ收め行者又  
高議を定め列位是一夜師父徒弟の字を云出は更らる  
師父と指て唐大官と呼べし八戒を猪三官悟浄を沙四官  
と呼老孫の孫二官と呼べし店中に至るを列位都て口を閉  
くへらば只何幹も老孫一個小任せ置る飯店の主人何の責  
買ぞと向む此馬を牽て様子と假我馬と賣て浮屠業と假  
十個の兄弟を要伴り我今四個旦前へ来りて爰小一宿を要  
む六個の兄弟を要伴り我今四個旦前へ来りて爰小一宿を要  
店の主人管は惟喜て款待へすと云々多し二個も是を聞  
此謀策上計ありと一斎小喜び個々準備整ひたるは遠小白

馬を牽て大路小出不及時城門小到つとる此時泰平の境  
外の城門を関は四個直に城中小入街上小漆て多きとる  
が御小行者が衣服を偷る飯店の前小至を彼旅人等  
家裡小在て或の衣服見ばと云者も有或の頭巾を失ひ  
と云者も有て言ふ小喚き嚷き居る行者心中合然然ど  
も夜の更を多を不知体小疾足小過往頃て一軒の飯店を  
見當行者前を依て門を搗き這裡小宿を多き處や有と呼  
つとを一個の婦人裡より答て官人連日這方へ入せぬと云又  
一個の漢子出来て馬を牽入急ぎ四個を樓上小道引り  
四個燈籠の後の火陰處より大家樓上小登る一個の婢婦又  
一箇の燈籠を携へ登るを行者曰く今宵月亮を燈光

を用ふ及ばとて火を吹滅絶小座定つとる時二箇の漢婦の  
樓を下つとる此家の主人五十有餘の婦人一個の了髪小四碗  
の茶を齎せて樓上小登ると二藏們四個小向ひ偕も列位那  
里より来つとるや亦甚の賣買を做りやと向つとる行者曰  
く我々の此方より来つとる馬を賣て活業とるは婦人  
曰く官人の尊姓は何候や行者曰く這二位の唐大官  
彼の猪二官這の汝四官老孫の孫二官とのへり婦人笑て曰  
く何れも異なる尊姓より行者曰く世間小不及姓を多  
我々十箇の弟兄を夥伴と六箇の尚城外小在明日一郡の  
馬を牽て此處へ来る婦人曰く一群小多女の馬を牽るや行  
者曰く大小百十疋餘り都て皆我牽る馬の若し唯毛片ハ





歸々不一婦人曰く孫大官人の寔小大夫の賈人有り侍傍の家  
小宿のしめ小若別人の家より管官人達を住る事能ひぬ我  
家房室潤く飼草料も又乏しく幾百疋の馬も去年の  
みとも都て皆能養ひ得べ我家爰小住する更多年我主人を  
趙氏より不幸ゆて早く世を去我今寡婦小て此家を存  
つ是故小世人我を喚ぶ趙寡婦と稱做つ我家原末上中下  
三様小客人を管待今小人を先小君子を後小日房錢を  
定め候人行者曰く常言小貨小高低三寺の價有客の遠近  
一般に看事無とりり府上愈生三様小客を管待や日疋を  
語つる人趙寡婦曰く彼上中下三様と日上下様ハ五果五菜  
小娘兒と請で陪歌を為しむ二位毎銀五錢中様も二果

三菜小娘兒を請は一位毎銀二錢下様の尊客小告る小  
及び唯便ち飯を用ひ幾文の飯錢を得のと行者曰く我江湖  
上小在て那里五錢の銀を出さらんや然を上様と安排未  
と趙寡婦是を聞て満心勸喜樓上と下んと做らた二藏行  
者小低語て曰く他猪羊の類を用る小有むやと曰へて行  
者是を聞て急ぎ趙寡婦を呼て曰く我今今日齋戒日を  
鮮を用るまらる趙寡婦訝して曰く官人達の長齋を  
候るや明齋を候るや行者曰く我今庚申齋を候る今  
日即ち庚申なり今宵旦素食を安排し飯錢の上様小依  
て奉上まらる趙寡婦是を聞て万千惟喜遂小樓上と下と  
り此二時有て許妾の素飯と安排まらり小師徒四個大

のほほ嬉び個々是を吃しけり食し終る時小至り趙寡婦  
又樓上へ登り来り行者小對ひ小娘兒の幾個呼べたやと問  
行者曰く我々既小齋戒日なり又六個の弟兄未だ未だ明  
日他們が来りし時個々會に呼んで樂じべし趙寡婦曰く  
然るを明日十人を請で待候んとて了髪を喚で家伙を收  
めさきて下つたり二藏やう行者小悄悄我感ご辛苦的なり我  
們若熟睡と頭巾を落し家人們小頭を見せり大の多る誤ち  
らばや一室の黒き處を要めて睡を可らん行者問て是理る  
とと黒頭急心又趙寡婦を呼んで曰く此猪三官濕氣あり汝  
四官の痲氣有て風を怕る唐大官の黒き處小睡毛病あり我  
も又差明と好に一室の黒輕處あり我々を睡むべし趙寡婦

少時沈吟と曰く我家眺望と專ふと造るとが黒き一室  
も亦涼きを好きて作こを風い殊小透にり風を心ひ里さ  
を好まぬ下室小一張の大櫃の侍小が裡小四五個睡べた  
程の寛さあり此裡風と通き光亮を透さば爰小入て睡ぬ  
奈何行者曰く甚好我々其櫃の裡小入て睡べし快く前行  
せよと云々趙寡婦大の小打笑ひ然るを這方へ来りてとて  
前小立て樓上を下り二藏師徒の行囊を取て跡小連れて樓  
上を下り後房の一邊より大櫃の裡小入行囊を挿き入一齋  
小成て睡りたり趙寡婦上より蓋を鎖し其身も臥房小退  
たり憐べし這四個仲夏暑氣の時節と云大櫃の裡小氣  
を困らば此二女の風さく透きとを個々替氣小堪難く彼方

繪本西遊記四編卷之貳

へ推這辺へ押せ三更過る時刻小寝小睡つと小着小者  
へ独却て眠らば故意と搦鬼と云て曰く我々が本身五千兩  
前日の馬三千兩今兩塔聯裡小四千兩あり這一群の馬と賣  
を又二千兩の有べり利益も又許多んと独細言居らるる

池田

繪本西遊記四編卷之貳

東牛池田  
池田屋

